

生田キャンパス

平和教育登戸研究所資料館を訪ねて

——平成31年3月16日

有 満 修

(法学部昭和35年卒)

### \*はじめに

歩いて吞んで書く——一定年後、母校明治の級友二人（上澤博、平山松司）と、こんな散策を楽しんでいます。歩いて吞むだけでは、楽しすぎます。ですから、ボケ防止のために書きます。まさに駄文です。そんな中から、生田キャンパスを見学したときに書いたものを送ります。

### \* 生田駅から登校路門へ

小田急線生田駅に10:00集合。定刻前なのに、上澤も平山も先に着いていた。生田には初めて来た。在学中のころは、生田には農学部の校舎を中心に広々と畑が広がっているのだろう——そんなイメージだった。ところが、それから何十年も経って、生田は農学部と理工学部が整備されていると聞くようになった。

先端的なキャンパスになったようだから、見学の機会をもちたいと長年思っていたところ、今回、上澤がその見学を企画してくれた。彼のプランはキャンパスの一隅に残してある旧陸軍登戸研究所資料館が主な狙いであるようだ。

いざ、出発。10分ぐらい歩くと、西北門（登校路門）。入るや長い坂道。在校生は難なくこの坂を毎日登るのだろうが、老人の我々先輩には厳しい坂だ。キャンパスは高台にあることが分かる。

その高台の広大な敷地には、いくつものきれいな校舎が並んでいる。なかなか立派なキャンパスだ。

### \* キャンパスは旧陸軍登戸研究所の跡

そもそもこのキャンパスの敷地は、旧陸軍の研究所跡である。戦略上、広い敷地が必要であった。しかも、研究内容を考えると、高台が適していたわけである。

終戦直後は、慶大日吉校舎が占領軍に撤収され、慶大がここの研究所の建物を使っていたようである。サンフランシスコ講和条約により占領が終結して、慶大は元に戻り、その後、全体の約半分を建物ごと昭和26年に明大が入手したのだそうである。

昭和12年（1937）、旧陸軍によって開設されたこの研究所は、同14年（1939）に大幅に機能が拡充された。第1科が電話・無線関係、風船爆弾。第2科が毒物・薬物・生物兵器・スパイ用品など。第3科が敵国の偽札や偽造パスポートの製造。

以上のような種々の秘密兵器が開発・製造された。正式名称は「第9陸軍技術研究所」。外部に研究・開発内容を知られてはいけなかったのも、「登戸研究所」と秘匿名で呼ば

れていた。

最盛期の昭和19年(1944)には、敷地11万坪、建物100棟余、技術将校・技師・技手などの幹部所員250名、一般の雇員・工員など総勢1000名の大規模な研究所であった。

#### \* 明治大学平和教育登戸研究所資料館

驚いたことに、あの有名な風船爆弾を製造して飛ばしたのも、ここからだっただけ。

子供のころの絵本に、防毒面をかぶって戦う兵隊さんが載っていた。敵が毒ガスをまく、そんな記憶がある。日本軍も、そんな化学兵器を開発せざるを得なかったわけだ。

そのような研究・開発内容の兵器類は、国際条約に反するものも含まれているのである。しかし、明大当局としては、このような戦争の暗部ともいえる部分を直視し、旧陸軍の研究施設であった建物を保存・活用して「明治大学平和教育登戸研究所資料館」を設立した。この趣旨には敬意を表したい。だが、平山は「難しい問題があるね」という。私大でやっている分には、政府は黙認するしかないだろう。むしろ、大学としては運営資金に対する補助金がほしいのではないかとも思うが、どうなっているのかは分からない。

#### \* 食糧・弾薬の補給を絶たれた日本軍

我が輩が知る太平洋戦争は、今は亡き兄(軍医中尉)の悲壮な体験が最も強烈に身に沁みている。南洋において乗っていた輸送船が米軍の魚雷に撃沈され、終日、海を泳ぐ。幸運にも救助されるが、ニュージーランドの近くの未開の島のジャングルで飢えを凌ぐ。そんな戦争である。

ここに簡単に記しておくことにしたい。

昭和17年9月、繰上げ卒業、同時に鹿児島島の陸軍第6師団第45連隊(西部第18部隊)に入隊。18年4月、シンガポール第一陸軍病院(英国のアレキサンダー医科大学没収)の軍医学校(南方軍衛生教育隊)に入校のため、広島市の宇品港から隠密出航。同校の戦陣教育を終え、同年8月、豪北派遣軍南方第19司令部軍医部付として、最前線・アンボン島(アンボイナ島)に向け赴任の途につく。スラバヤ港から乗った輸送船「明石丸」がバンダ海で米軍潜水艦の魚雷攻撃を受け、撃沈される。一昼夜、海中を泳いだ末に、海軍の水雷艇「雉」に救助され、アンボン島に上陸。その島から未踏のセラム島に送られ、部隊ごとに兵舎を作ったり、道路を作ったり、すべて自給自足するしか術がない。

毎日、恐怖と飢えの中で将兵の診療に明け暮れる。食糧も医薬品も物資はすべて本土からの補給を断たれ、米粒ひとつなし。トカゲ、ワニ、ニシキヘビ、ダチョウ、イノシシ、タケノコなど、部隊は食べられるものを捜して、飢えを凌ぐ。

20年8月、同島のジャングルの中で降伏・敗戦を知る。残念ながら武装解除され、悔しくも捕虜の身となる。昭和21年6月に復員船(米の輸送船)で引き揚げるまでの3年間をジャングルのなかで、悪戦苦闘、やっと生き延びた。和歌山県田辺港に帰還。

こんな戦況はたまたま知る身内のことであるが、ほんの氷山の一角であろう。  
制海権、制空権を失えば、戦争は負けである。外地の最前線は、食糧や弾薬の補給を絶たれたから、将兵は飢えてしまった。もう完全に敗けたのである。

だのに、祖国を離れてこんな状況に陥っている将兵を放置したまま、本土決戦など、とぼけたことを考えて、長野県松代の地下を掘って大本営を移そうとしているのである。この登戸研究所の主たる機能も、長野県伊那地方などに疎開したようである。

戦前の陸士（陸軍士官学校）や海兵（海軍兵学校）は、全国の秀才を集めたという。それなのに、その秀才たちの判断力のなさは、どう考えても理解できるものではない。複雑な事情があったにしても、少なくとも1年早くギブアップすれば、米軍による東京をはじめ全国各地がやられた悲惨な空爆は避けられたはずだ。民間人の死者がいかにも少なくて済んだか計り知れない。また、少なくとも1月早くギブアップすれば、ソ連は参戦できなかつたし、満州における民間人の悲劇は避けられ、今に残る北方領土の問題も起きなかつたはずだ。——と、庶民は考えるのだ。

#### \* 美人の案内嬢

さて、話を元に戻す。この資料館に入ると、受付で「明治大学平和教育登戸研究所資料館ガイドブック」（A4判30頁の冊子）を配布してくれる。これをみれば、詳しいことが分かる。

上澤がガイドを頼んだら、聡明な美人の案内嬢（明大職員）が応じてくれた。展示室を回りながら、非常に要領よく的確な説明をしてくれた。

「川崎は全面的に空襲されたけれども、ここだけは爆撃されずに残された。ここで研究に当たっていた軍人たちは戦犯にもひっかからなかつた。ということは、米軍は、ここでどんなことが行われているかを知っていたのではないか。だから、ここは残して、今後活用できるかもしれないと考えていたに違いない、とも言われています。」

最後に、このように語ってくれた美人案内嬢の顔が印象に残る。

#### \* 花をみながら生田駅に

帰りもまた、坂を下って西北門を出る。生田駅に向かって歩く。駅の手前の五反田川沿いに桜が咲いている。遠回りになるが、近づいてみることに。薄いピンクの早咲きだから、河津桜であろう。ソメイヨシノではなく河津桜の並木にしたのには、それなりの発想があつたのだろう。

その花をバックに写真を撮る。化学兵器のことなど思い知らされた後だけに、ちらっと、世の中、平和だな、と思う。

「咲く花や戦争を知るあの坂は」

後は昼食会だ。いつも酒は昼に呑む。